

Je t'attendais型半過去のGuillaume派言語学からのアプローチ*

横井 雅明

0. はじめに

本稿で扱うフランス語のJe t'attendais型半過去とは、阿部 (1989)において提示されている以下のような例である¹。

- (1) (人が来て) Je t'attendais. 「待ってたんだよ」
- (2) (人に会って) Je te cherchais. 「捜してたんだよ」
- (3) (人が入ってきて) Je dormais. 「眠っていたんだ」
- (4) (確証を得て) Tu avais raison. 「君が正しかった」
- (5) (見つけて) Ah! vous étiez là. 「ああ、そこにいたのですか」
- (6) (同意を得て) Je savais que tu serais contente. 「あなたは満足すると思っていましたよ」

この半過去の用法は、次の(7)のような一般的な半過去の用法と比較して、特異なものとされている。

- (7) Je lisais quand il entra (il est entré). 「彼が入ってきた時、私は本

* 本論文提出にあたり2名による査読を得ました。査読委員の方に感謝申し上げます。

¹ 阿部 (1989) p.55. この半過去の用法は、後述するように、西村 (1985)において現在にかかわる大過去の用法とともに指摘された特殊な用法であるが、これは朝倉 (1955) p.181 で「企てた行為の中断」として記述されているものである。阿部 (1989) はこのような半過去をJe t'attendais型半過去と名付けた。

を読んでいた」²

(1)から(6)の半過去の特異な点は、1. もっぱら話し言葉でのみ用いられる、2. 通常の半過去では、他の時制や文脈、時の副詞句（例文(7)では「彼が入ってきた時」）とともに用いられる非-自立的用法が主であるが、この半過去はそのような「支え」を必要としない、3. この半過去によって表現される事行が発話時点の「直前」まで続いている（または発話時点以降も続いている）、という3点である。半過去のこの用法に関しては、西村（1985）、阿部（1989）、春木（1991）、東郷（2007）などの研究があるが、そこで問題とされているのは、(a) この半過去によって表現される事行が発話時点直前で終了するもの（例文(1)～(3)）と発話時点以降も続くもの（例文(4)～(6)）との間の統一的説明と、(b) 半過去全体の用法の説明の中でのJe t'attendais型半過去の位置付けである。本稿はこれらの問題に対して、これまでなされて来なかったGuillaume派言語学からのアプローチを行うことを目的とする。

1.

1.1. 西村（1985）

現在（＝発話時点）に関わる半過去の用法を最初に指摘したのは西村（1985）である³。西村は以下の(8)、(9)のような大過去の例とともに、(10)のような半過去についても説明を試みる。

² 朝倉（1955）p.180.

³ 西村（1985）p.53にあるように、半過去のこのような用法は、朝倉（1955）にわずかに記述があるが、西村が指摘するまで、問題にされることはなかった。

- (8) Jean arrive? Je lui avais écrit de ne pas venir. 「ジャンが来るって？
来ないようにと手紙で言ってあったのに」
- (9) J'avais oublié. 「忘れていましたよ」
- (10) Tiens! tu travaillais? 「おや、仕事だったの？」

西村はこの大過去と半過去の用例を「不連続」という概念で説明する。すなわち、(9)は次の(11)のような複合過去が「忘れてしまった」(→その結果→「覚えていない」)を意味するのに対して、「忘れていたよ」(→しかし←「今は思い出している」)を意味する。(11)の複合過去が「何らかの形で現在に「連続」している」のに対し、(9)は現在との「不連続」を表すということである。

- (11) J'ai oublié. 「忘れてしまった」

同様に半過去の(10)の例は次の(12)の現在形とは異なり、「「今、中断した」という状況あるいは前提」があり、やはり現在と「不連続」であることを表す。

- (12) Elle travaille depuis deux heures. 「彼女は2時間前から仕事をしている」

(12)の現在形は「前・線・連続＝現在形」で表現され、「前・線・不連続＝半過去形」の(10)とアスペクト「連続／不連続」で対立している。また同様

に、(11)の複合過去形は「前・点・連続＝複合過去形」であり、「前・点・不連続＝大過去形」の(9)と対立している。

しかしながら、春木 (1991)も指摘しているように、西村 (1985)の分析は、大過去が中心となっている。

1.2. 阿部 (1989)

西村 (1985)に見られる半過去の用法をJe t'attendais型半過去と名付け、その分析を行ったのが阿部 (1989)である。阿部は、先に挙げた(1)～(6)の例文の事行はSITUATION (「+時間幅」、「-終点」)で「均質」であると言う⁴。そして、これらの文において観察されることは、例えば(1)であれば「待つ行為」に対して「到着」、(2)であれば「捜す行為」に対して「出会い」というように、「均質な事行」に対して、「事行にとって外的な事件」が出現するという特徴を挙げている。阿部はこれを「異質なファクター」と呼ぶ。

そして、この「異質なファクター」が出現する時点において、行為・状態が終了するか ((1)～(3))、あるいはその後も行為・状態が続くか ((4)～(6))によって、2種類の解釈を提案する。例えば、(1)では「到着」以前の期間において[attendre (moi, toi)]であったのが、「到着」によって打ち切られるので「終了」の推測的解釈が成立する。他方、例えば、(4)では「確証獲得」以前の期間において[avoir raison (toi)]であったと述べられているが、「確証獲得」はそれを打ち切るものではなく、その後も有効であるため、「持続」の推測的解釈が成立する。ここにおいては、この2種類の解釈が可能なJe t'attendais型半過去の統一的解釈には至っていない。

⁴ 阿部 (1989) p.56.

1.3. 春木 (1991)

春木は、現在 (= 発話時点) に関わる半過去を、発話行為における操作の一つである「確認行為」という観点から考察する。まず、春木は、Je t'attendais型の半過去の3つの特徴を指摘する。それは、(1) 話し言葉で用いられること、(2) 半過去の他の用法と違い、文脈や他の時制、時の副詞句といった時間的位置づけのための支えなしに自立的に用いられること、(3) この半過去によって表される事行が発話の直前まで継続していたり、その発話以降も続いていたりする、という点である⁵。この3つの特徴は、その後のJe t'attendais型半過去の研究において、了解事項となっている。

その上で、春木はこの半過去の考察には、発話行為の過程においてどのような操作が行われているのかを考える必要があると主張する。すなわち、Je t'attendais型半過去の例に共通していることは、「(再) 確認」confirmationという行為が行われていることであると言う。例えば、相手を見つけて「ずっと捜していたんだよ」というのは(2)の例、「過去のある時点において、ある事態が存在していたことを発話時点において改めて確認し直している」のだと言う。そして、現在から任意の時間幅だけ過去に遡ってその時点における状態や行為を眺めると、それが「捜していた」なので、「この種の半過去は、現在に繋がっている事柄を表しているのではない」と言う⁶。その結果、「視点の移動を本質的な特性とする半過去」から見れば、けっして例外的な用法ではないと結論づけている。しかしながら、この解釈では、例えば、Je

⁵ 春木 (1991) p.77.

⁶ *ibid.*, p.78.

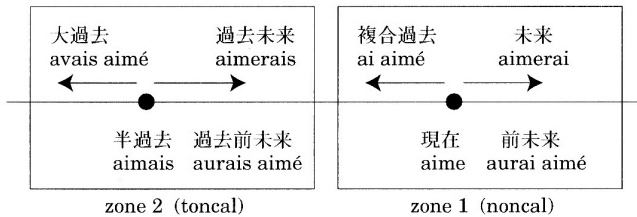
lisais quand il entra (il est entré). 「彼が入ってきた時、私は本を読んでいた」のような非-自立的半過去の用法とは異なる、「発話時点の直前まで動作が継続している」というJe t'attendais型半過去の特徴をうまく説明できない。

1.4. 東郷 (2007)

これらの研究を受けて、東郷は、Je t'attendais型半過去の新たな説明を試みる。

まず、東郷は、半過去の考察においては、時制体系全体の考察が必要であると指摘し、フランス語の時制体系について、次のような全体像を提案している⁷。

(13)



この図式から導き出される主張の内、本論考に関わるもののみを以下に引用する。

⁷ 東郷 (2007) p.20.

(14)

(A) zone 1は「現在」を中核とする時制群である。zone 1に属する時制はすべて、「現在」の表す発話時点 t_0 に視点を置いて眺められた事態を述べる。

(B) zone 2は「半過去」を中核とする時制群である。zone 2に属する時制はすべて、「半過去」の表す発話時点 t_1 に視点を置いて眺められた事態を述べる。

(C) 視点を置くことができるのは、現在と半過去に限られる。その他の時制は、「基準点」にはなりえても、視点を置くことはできない。

(D) 過去・現在・未来の三分法が定説となっているが、時制はzone 1 / zone 2の二分法で考えるべきである。未来は独立のzoneを形成しない。

(E) zone 1を時間軸に沿って過去方向に平行移動するとzone 2が得られる。この意味で、zone 2はzone 1が過去に投影されたものである。半過去は文字通り「過去における現在」である。

(G) zone 1とzone 2とは断絶している。ここで言う「断絶」とは、異なる「世界」を構成しているという意味である。⁸

(C)において、「視点」という用語と「基準点」という用語が見られるが、これは次のように定義される。まず、東郷は、Reichenbach (1966)⁹のS,E,Rの時制図式では次の(15)のような例が説明できないと指摘する。

⁸ *ibid.*, p.20-21.

⁹ "Elements of Symbolic Logic"

(15) *Hélène pensait que Julien serait arrivé chez lui avant minuit.* 「エレーヌはジュリアンが午前0時前に家に着くだろうと思っていた」

この例では、*minuit* 「午前0時」が基準点Rとなり、過去前未来*serait arrivé* 「着くだろう」が出来事Eを表すのは明らかなので主節の半過去*pensait* 「思っていた」がはみ出してしまい、与えるべき位置づけがないことになる。この不備を補修するために、東郷は「視点」を設定する。これを次のように定義する。

(16) 「視点」とは、話し手（または話し手が自己投影する人物）が、その時点に身を置いて、そこから過去を振り返り、未来を望むことができるような時点を言う。「基準点」とは、話し手（または話し手が自己投影する人物）が、ある出来事E1を時間軸上に位置づけるときに利用する他の出来事E2の起きた時点を言う。¹⁰

ここで注目すべきは、東郷が(14-C)にあるように、現在と半過去の類似性、及び、その他の時称群との相違について指摘している点である。筆者もフランス語時制は、(14-D)にあるように、「現在」を中心とする時称群と「半過去」を中心とする時称群に分けられると考えている（後述）。

東郷はさらに、Le Guern (1986)が区別したふたつの半過去、すなわち *imparfait de discours* と *imparfait de récit* の区別に基づいて、*imparfait de discours* では zone 1 と zone 2 の両方が発動されるのに対し、*imparfait de*

¹⁰ 東郷 (2007) p.22.

récitでは、発動されるのはzone 2のみであると主張する。前者では、zone 1の中核に位置する「現在」を基点としてzone 2に含まれる過去の事態を述べるのに対して、後者では、zone 1は背景化されて隠れるため、「現在」の関与は無効化される、と言う。

そして、imparfait de discoursでは、zone 1とzone 2は「断絶しているため、zone 2で真である事態がzone 1では真ではないという含意が生じる」と言う¹¹。この「断絶」という概念で、西村が指摘した「不連続」という半過去の特性を説明できるとしている。

これらの分析を踏まえて、東郷はJe t'attendais.型半過去を説明する。Je t'attendais型半過去は基準点を必要とせず自立的に使われるため、imparfait de discoursの一種と見なすことができることから、次の特徴を導く。

(17)

- (A) zone 1とzone 2の両方が発動される。
- (B) zone 1の現在に視点を置いてzone 2の過去の事態を眺めている。
- (C) zone 1とzone 2とは断絶しているので、Je t'attendais.が表す過去の事態[je-t'attendre]と現在の間には「断絶」がある。¹²

これによって、Je t'attendais型半過去のこれまでの疑問は解けると言う。例えば、西村 (1985)の「不連続」については、[je-t'attendre]が成立するzone 2と現在が構築するzone 1の間に「断絶」があるからと説明する。この「断

¹¹ *ibid.*, p.24.

¹² *ibid.*, p.26.

絶」は、事象レベルにおいては「現在における事態の不成立」を表し、「現在私はもう君を待つてはいない」ことになると言う。

東郷 (2007)の独創的な点は、以下の点である。すなわち、Je t'attendais 型半過去の中の、「現在での事態の不成立を意味しない」ケースの説明である。ここで、東郷は「話し手の認識レベルでの断絶」を提案する。例えば、

(18) Ah! vous étiez là. [= (5)]

において、事象レベルの[vous-être-là]はzone 2からzone 1まで真であるけれども、認識レベルの「そこにいることに気づかなかった過去」と「そこにいることに気づいた現在」の間には「発見」という断絶があるということであり、次のように図示されている¹³。

(19)

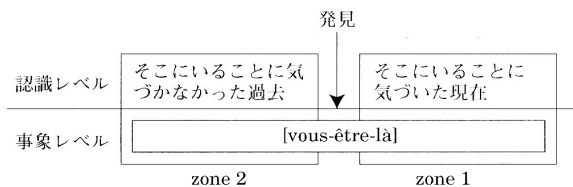


Fig. 7

すなわち、「断絶」は、事象レベルではなく、認識レベルにおいて存在するので、発話時点以降も[vous-être-là]が真であることを妨げないのである。

¹³ *ibid.*, p.27.

しかしながら、東郷の、zone 1とzone 2を同一軸上に位置づけるような表記の仕方¹⁴では、半過去と現在を時間的に直結している点が問題であると思われる。(I4-E)のような時制解釈からは、Je lisais quand il est entré.「彼が入ってきた時、私は本を読んでいた」のような複合過去によって表される事行と半過去によって表される事行の「同時性」がうまく説明できない。

2.

2.1. フランス語の時制体系

第1節で挙げた先行研究の問題点は、半過去と現在を同一の時間軸上に位置づけている点にあると思われる。この点を検証するにあたって、フランス語の時制体系を見直してみたい。

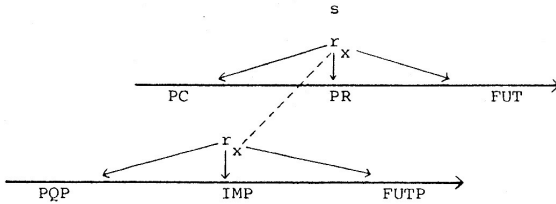
Martin¹⁵ (1987)でも述べられているように、フランス語の時制を2つの下位体系に分けるのは決して目新しいことではない。事実、Vet (1980)には次のような図式が見られる¹⁶。

¹⁴ (13)図、および(14-E)参照。

¹⁵ Guillaume 派言語学の継承者

¹⁶ Vet (1980) p.32. 図中、PR は直説法現在形、PC は複合過去形、FUT は単純未来形、IMP は半過去形、PQP は大過去形、FUTP は条件法現在形を表す。

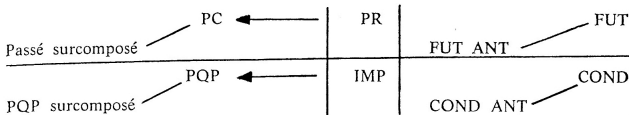
(20)



ここで、 r_x は発話時点から直接的に位置づけられる「基準点」である。Vetは、PRとIMPのみが、それを中心に、先行[antériorité]を示す時称と後続[postériorité]を示す時称を形成することが出来る時称であるということから、2つの完全な下位体系が存在すると言う。1つはPCとPRとFUTを含み、もう1つはPQPとIMPとFUTPを含む。前者は発話時点(s)と一致する基準点 r_x を中心に位置づけられ($r_x=s$)、後者は同様に r_x と表記されるがsより先行する基準点を中心に位置づけられる($r_x<s$)。この2つの下位体系は、sに対する r_x の位置のみが異なっている¹⁷。

さらに先行する、Martin (1971)においては、次のような図式が見られる¹⁸。

(21)



¹⁷ *ibid.*

¹⁸ Martin (1971) p.155. 図中、FUT ANT は前過去形、COND ANT は条件法過去形を表す。

ここでは、PRを中心とする下位体系とIMPを中心とする下位体系が、完全に並行の関係として捉えられていて、PRとIMPの時間的差異は表現されていない。ただ、2つの異なる次元に位置づけられることが示されているのみである。斜めの線はアスペクト的關係を表している。

ここで、着目したいのは、VetもMartinも2つの時制下位体系を「一本の」時間軸上には位置づけていないことである。半過去は（東郷が主張するような）現在からそのまま過去に移動したものではなく、「現在」を中心とする時称群と「半過去」を中心とする時称群は異なる次元に位置づけられているということである。半過去は時間的には当然現在よりも過去の方に位置づけられるが、それは時間的区別ではなく、「次元が異なる」体系と考えられているということである。東郷(2007)が主張するような、zone 1をそのまま過去に移動してzone 2が得られるというような図式では、Je lisais quand il est entré. 「彼が入ってきた時、私は本を読んでいた」のようなPCによって表される事行とIMPによって表される事行の「同時性」がうまく説明できない。

2.2. 現在と半過去の類似性

半過去は「過去における現在」であると言われるが、半過去と現在は多くの類似性を呈するもののけっして同価値ではない。Martinは次のような例を挙げて説明している¹⁹。Il sortと言う時には、「彼が出かける」というあらゆる条件が集結しており、まさに出かけようとしている最中であり、「出かけ

¹⁹ Martin (1987) p.129.

ない」ということを思わせるものは何もない。もし「彼が出かけない」ならば、言表を改めなければならない。しかし、Il sortaitというのは、大抵の場合、「Il allait sortir」「彼は出かけようとしていた」と解釈され、実際に出かけたかどうかは表現されていない。

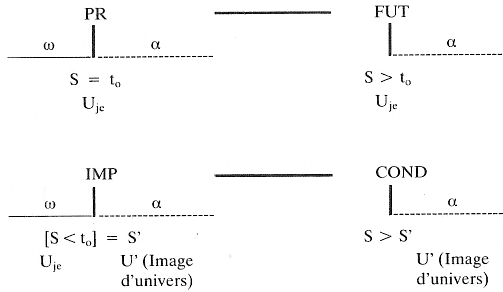
さらに、Alors là, le train déraillait! 「そこで、列車が脱線するところだった」はirréel [非現実]を表現していて、「実際には脱線は起こらなかった」を意味する。一方、Alors là, le train déraille! 「そこで、電車が脱線するぞ!」は、条件が変わらない限り「脱線が避けられない」ことを意味する。

これらの違いを、MartinはGuillaume (1929)が提唱した α と ω というchronotypes [時間切片]を用いて説明する。MartinはGuillaumeの α/ω を修正・発展させて用いているが、本稿では、Martin (1987) p.127-128にあるような定義で用いることにする。すなわち、例えば「書架を整理している」というPRの事行について言うと、「すでに整理されている部分」を ω 、「これから整理されるべき部分」を α とする。このGuillaume派言語学の分析法はフランス語学研究の中では特殊な位置付けにあるが、このchronotypes理論を用いることにより、Je t'attendais型半過去の新たな説明が可能になると考え、本稿でこれを用いる。

Martinは先の半過去と現在形の例文について、次のように説明している。すなわち、PRは、 ω と α 両方によって現実的時制[temps actuel]に属している、つまり、話者はPRに内在する α も ω もともに現実世界[univers actuel]の中に受け持っているのに対して、IMPにおいては、その受け持ちは ω のみであって、 α はimage d'univers (U') [仮想世界]に属しているのである²⁰。

²⁰ *ibid.*, p.130. 図中、 U_{je} は univers de croyance de je (話者の世界)を表す。

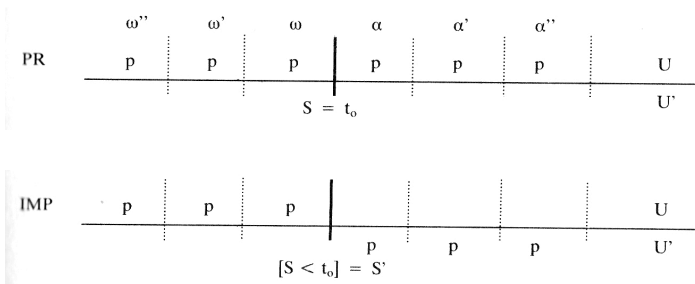
(22)



IMPにおいては、 α 部分の不確実性を生じさせるために、話者はあたかも事行の続きを知らないかのごとくふるまわなければならない。そこで、未来ではないが、未来と類似した予見的状态[situation d'expectative]を生じさせることになる。これは、現実世界に属するものではなく、image d'univers (U')に属するものである。このことを、次のように図示している²¹。

²¹ *ibid.*, p.131. 図中、本稿の考察に関係がない FUT と COND (条件法) は削除した。

(23)



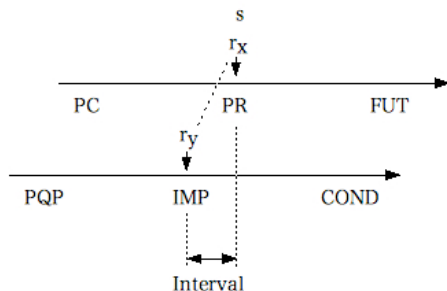
Martinの先に提示したAlors là, le train déraillait!という例においては、基準点 S' 以降に、「脱線する」という事行 p は U' の世界に移行しており、非現実の解釈が可能になるということである。

3.

第2節のVet、Martinの時制体系の解釈と、MartinのIMPの解釈をもとに、Je t'attendais型半過去を考察する。

まず、Je t'attendais型半過去の最も大きな特徴である、「現在時」とのつながりであるが、これは以下のような図を提案することで説明できる。

(24)



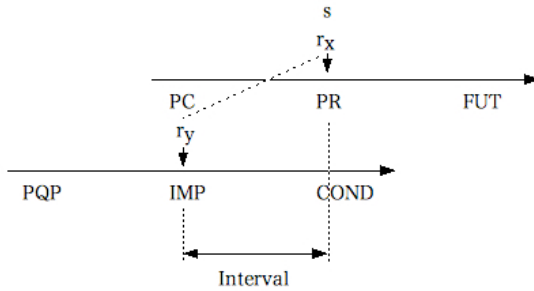
発話時点(s)を基準点(r_x)とする、PC-PR-FUTの現実世界 (Martinの U_{je}) と、 s よりも過去に位置づけられる基準点 r_y を中心に配置されるPQP-IMP-CONDの世界は、Vet、Martinらが主張しているように、1本の時間軸上に位置づけられるものではなく、異なる次元²²に配置されるものである。東郷が「断絶」と呼んでいるものは、ここでは「次元の違い、次元の間の隔たり」として表されることになる。

この、2つの次元の基準点 r_x と r_y の間の時間的距離 (Interval) が問題となる。すなわち、通常の半過去の用法においては、このIntervalがある程度の大きさをもっているのに対して ((25)参照)、Je t'attendais型半過去においては、このIntervalが限りなく0に近い (しかし0ではない) ものである ((26)参照)、ということである。例えば、Je lisais quand il est entré. 「彼が入ってきた時、私は本を読んでいた」 においては、「彼が入ってきた」というPC

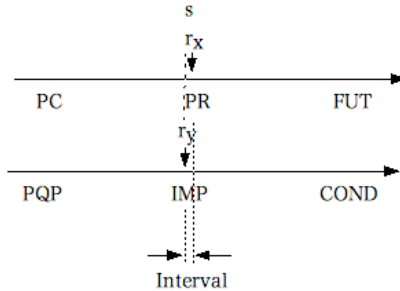
²² ここで言う「次元」とは、Vet (1980)やMartin (1971)で示されているような、フランス語時制の2つの下位体系において展開される世界であり、PRを中心とする世界とIMPを中心とする世界の2つの次元が存在することになる。

の時点と同時 (r_y) に「本を読んでいた」というIMPの動作の継続が位置づけられるが、これは、発話時点 (r_x) から見ると過去のことであるので、いくらかの時間的距離[Interval]が存在する。しかし、Je t'attendais型半過去では、動作は発話時点直前まで継続しているのに、Intervalは極小である(26)。

(25)



(26)



しかも、この近接性は、同じ次元の時間軸上におけるものではなく、IMPは、発話時点とは異なる次元に位置している。ここにJe t'attendais型半過去と発話時点の間の「断絶」がある。このようにして、一般的な半過去の用法も、Je t'attendais型半過去の用法も、このIntervalの大きさの違いに還元され、統一的な解釈が可能になる。

そして、Je t'attendais型半過去の2種類の用法、すなわち、この半過去によって表現される事行が発話時点直前で終了するか、あるいは発話時点以降も続くかは、第2節で見たMartinの半過去の解釈によって説明できる。すなわち、IMPの世界の基準点(r_y) (Martinの図(23)中：S'で、阿部の言う「異質なファクター」が起こる時点)以降の部分は、p(rédictat)「述語」は U_{je} から U' [image d'univers]に移行し、そこにおいては ω において真であったpが α において真であり続けるか、あるいはそうでないかは表現されていない。(1)のJe t'attendais.の例では[attendre (moi, toi)]、(5)の例では[vous-êtré-là]という事行が、 ω'' から ω' を経て ω に至る部分で真であるけれども、 α 以降においては真であるかないかについては「関知していない時称形」であるということなのである。IMPは、 ω の部分のみに責任を負っている時称なのである。したがって、Je t'attendais型の2つの解釈が可能になる時称であり、このことはpが U_{je} にあり続けるPRには不可能なことである。

4.

以上のように、Je t'attendais型半過去の解釈の従来の問題点は、Guillaume派言語学の継承者であるMartinの説明を敷衍することによって、説明できる

ことを見た。Je t'attendais型半過去と一般的な半過去の用法は、同じ理論で説明することが出来る、すなわち、2つの基準点の間の時間的距離 (Interval) が異なるのみで、同じ説明が可能である。従来の研究は、「現在に関わる大過去・半過去」ということにとられるあまり、現在時（発話時点）から直接的に時間を遡る、1本の時間軸上に半過去を位置づけてしまっていることが問題であるように思われる。

そして、Je t'attendais型半過去の可能な2種類の解釈、すなわちこの半過去によって表現される事行が発話時点直前で終了するか、あるいは発話時点以降も続くかは、Guillaume派言語学の α/ω 理論 (chronotypes理論)、及びその継承者であるMartinの半過去の解釈から、説明が可能である。

参考文献

- Fuchs, Catherine (1986) : « L'ambiguïté et la paraphrase en psychomécanique: l'exemple de l'imparfait », Le Goffic, Pierre (éd) : *Points de vue sur l'imparfait*, Centre d'Études Linguistiques de l'Université de Caen.
- Le Goffic, Pierre (1986) : « Que l'imparfait n'est pas un temps du passé », Le Goffic, Pierre (éd).
- Le Guern, Michel (1986) : « Notes sur le verbe français », Rémi-Giraud et Michel Le Guern (éds) : *Sur le verbe*, P.U. de Lyon.
- Guillaume, Gustave (1929) : *Temps et verbe - Théorie des aspects, des modes et des temps*, Ancienne Honoré Champion.

- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- Martin, Robert (1971) : *Temps et aspect - Essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Klincksieck.
- _____ (1987) : *Langage et croyance - Les « univers de croyance » dans la théorie sémantique*, Pierre Mardaga.
- Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Ejnar Munksgaard.
- Vet, Co (1980) : *Temps, aspect et adverbess de temps en français contemporain - Essai de sémantique formelle*, Droz.
- Wilmet, Marc (1976) : *Études de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
- 朝倉 季雄 (1955) : 『フランス文法事典』, 三省堂.
- 阿部 宏 (1989) : 「Je t'attendais 型の半過去について」, 『フランス語学研究』 23号.
- 東郷 雄二 (2007) : 「Je t'attendais型半過去再考」, 『フランス語学研究』 41号.
- 西村 牧夫 (1985) : 「現在にかかわる大過去」, 『フランス語学の諸問題』, 三修社.
- 春木 仁孝 (1991) : 「Je ne savais pas que c'était comme ça. 一再確認の半過去一」, 『フランス語フランス文学研究』 59号.